

CS こひつじ科礼拝式次第

2022年8月7日 午前9時30分

2022年度年間テーマ：「イエス様の祈り『主の祈り』によって、祈ることを身につけよう」

テーマ曲：ワワワいっしょに（92番）

暗唱聖句：「すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。聖なる生活を抜きにして、だれも主を見ることはできません。」
ヘブライ人への手紙12章14節

7、すずめやはとを（こどもさんびかをお用いください）

おいのり 礼拝に招かれたことを感謝しましょう

せいしよ 創世記27章1～40節

イサクは年をとり、目がかすんで見えなくなってきた。そこで上の息子のエサウを呼び寄せて、「息子よ」と言った。エサウが、「はい」と答えると、イサクは言った。「こんなに年をとったので、わたしはいつ死ぬか分からない。今すぐに、弓と矢筒など、狩りの道具を持って野に行き、獲物を取って来て、わたしの好きなおいしい料理を作り、ここへ持って来てほしい。死ぬ前にそれを食べて、わたし自身の祝福をお前に与えたい。」リベカは、イサクが息子のエサウに話しているのを聞いていた。エサウが獲物を取りに野に行くと、リベカは息子のヤコブに言った。「今、お父さんが兄さんのエサウにこう言っているのを耳にしました。

『獲物を取って来て、あのおいしい料理を作ってほしい。わたしは死ぬ前にそれを食べて、主の御前でお前を祝福したい』と。わたしの子よ。今、わたしが言うことをよく聞いてそのとおりにしなさい。家畜の群れのところへ行って、よく肥えた子山羊を二匹取って来なさい。わたしが、それでお父さんの好きなおいしい料理を作りますから、それをお父さんのところへ持って行きなさい。お父さんは召し上がって、亡くなる前にお前を祝福してください。」しかし、ヤコブは母リベカに言った。「でも、エサウ兄さんはとても毛深いのに、わたしの肌は滑らかです。お父さんがわたしに触れば、だましているのが分かります。そうしたら、わたしは祝福どころか、反対に呪いを受けてしまいます。」母は言った。「わたしの子よ。そのときにはお母さんがその呪いを引き受けます。ただ、わたしの言うとおりに、行って取って来なさい。」ヤコブは取りに行き、母のところへ持って来たので、母は父の好きなおいしい料理を作った。リベカは、家にしまっておいた上の息子エサウの晴れ着を取り出して、下の息子ヤコブに着せ、子山羊の毛皮を彼の腕や滑らかな首に巻きつけて、自分が作ったおいしい料理とパンを息子ヤコブに渡した。ヤコブは、父のもとへ行き、「わたしのお父さん」と呼びかけた。父が、「ここにいる。わたしの子よ。誰だ、お前は」と尋ねると、ヤコブは言った。「長男のエサウです。お父さんの言われたとおりにしてきました。さあ、どうぞ起きて、座ってわたしの獲物を召し上がり、お父さん自身の祝福をわたしに与えてください。」「わたしの子よ、どうしてまた、こんなに早くしとめられたのか」と、イサクが息子に尋ねると、ヤコブは答えた。「あなたの神、主がわたしのために計らってくださいからです。」イサクはヤコブに言った。「近寄りなさい。わたしの子に触って、本当にお前が息子のエサウかどうか、確かめたい。」ヤコブが父イサクに近寄ると、イサクは彼に触りながら言った。「声はヤコブの声だが、腕はエサウの腕だ。」イサクは、ヤコブの腕が兄エサウの腕のように毛深くなっていたので、見破ることができなかった。そこで、彼は祝福しようとして、言った。「お前は本当にわたしの子エサウなのだ。」ヤコブは、「もちろんです」と答えた。イサクは言った。「では、お前の獲物をこ

こへ持って来なさい。それを食べて、わたし自身の祝福をお前に与えよう。」ヤコブが料理を差し出すと、イサクは食べ、ぶどう酒をつぐと、それを飲んだ。それから、父イサクは彼に言った。「わたしの子よ、近寄ってわたしに口づけをしなさい。」ヤコブが近寄って口づけをすると、イサクは、ヤコブの着物の匂いをかいで、祝福して言った。「ああ、わたしの子の香りは主が祝福された野の香りのようだ。どうか、神が天の露と地の産み出す豊かなもの、穀物とぶどう酒をお前に与えてくださるように。多くの民がお前に仕え、多くの国民がお前にひれ伏す。お前は兄弟たちの主人となり、母の子らもお前にひれ伏す。お前を呪う者は呪われお前を祝福する者は祝福されるように。」イサクがヤコブを祝福し終えて、ヤコブが父イサクの前から立ち去るとすぐ、兄エサウが狩りから帰って来た。彼もおいしい料理を作り、父のところへ持って来て言った。「わたしのお父さん。起きて、息子の獲物を食べてください。そして、あなた自身の祝福をわたしに与えてください。」父イサクが、「お前は誰なのか」と聞くと、「わたしです。あなたの息子、長男のエサウです」と答えが返ってきた。イサクは激しく体を震わせて言った。「では、あれは、一体誰だったのだ。さっき獲物を取ってわたしのところに持って来たのは。実は、お前が来る前にわたしはみんな食べて、彼を祝福してしまった。だから、彼が祝福されたものになっている。」エサウはこの父の言葉を聞くと、悲痛な叫びをあげて激しく泣き、父に向かって言った。「わたしのお父さん。わたしも、このわたしも祝福してください。」イサクは言った。「お前の弟が来て策略を使い、お前の祝福を奪ってしまった。」エサウは叫んだ。「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り（アーカブ）欺いた。あのときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった。」エサウは続けて言った。「お父さんは、わたしのために祝福を残しておいてくれなかったのですか。」イサクはエサウに答えた。「既にわたしは、彼をお前の主人とし、親族をすべて彼の僕とし、穀物もぶどう酒も彼のものにしてしまった。わたしの子よ。今となつては、お前のために何をしてやれようか。」エサウは父に叫んだ。「わたしのお父さん。祝福はたった一つしかないのですか。わたしも、このわたしも祝福してください、わたしのお父さん。」エサウは声をあげて泣いた。父イサクは言った。「ああ、地の産み出す豊かなものから遠く離れた所、この後お前はそこに住む、天の露からも遠く隔てられて。お前は剣に頼って生きていく。しかしお前は弟に仕える。いつの日にかお前は反抗を企て、自分の首から軛を振り落とす。」

おはなし

「一番大切なもの」

雨宮寧々先生

今日はヤコブとエサウのお話です。

この二人はイサクさんとリベカさんの間に生まれた双子です。

赤くて全身が毛むくじゃらの兄をエサウ、兄のかかと（アケブ）を掴んで出てきた弟をヤコブと名付けました。

エサウは野原を駆け巡り、動物を捕まえる狩人というお仕事をしています。ヤコブは畑のお仕事や羊のお世話をしていました。

お父さんのイサクはエサウを、お母さんのリベカはヤコブを可愛がっていました。

イサクがすっかりおじいさんになったある日、イサクはエサウを呼んで「動物をとってきて私の好きな料理を作っておくれ。私が死ぬ前にあなたを祝福しよう。」と言いました。

それを聞いたお母さんのリベカは、こっそりとヤコブに言いました。「私がおいしい料理を作るので、よ

く肥えた子山羊を二匹とってきなさい。それをエサウになりすまして持っていきなさい。」そして、ヤコブはエサウのように毛深くみせるために腕や首に動物の毛皮を巻きつけて、お母さんの言うとおりにしました。

お父さんのイサクはもう目が見えないので、ヤコブの腕を触ってエサウだと思ってしまい、ヤコブを祝福しました。ヤコブは長子の権利を自分のものにしてしまったのです。

リベカとヤコブはイサクにうそをつきました。人をだますことは神さまは喜ばれません。でも神さまはそもそも、エサウとヤコブが競争すること、そして兄が弟に仕えること（26章23節）をイサクとリベカに知らせていました。イサクとその家族は知らないうちにその通りに生きたのです。人の悪だくみや、神さまに喜ばれない思いや行いをも神さまはご計画にそって用いられることに私たちは驚きます。私たちも生まれる前から神さまのご計画の中にあることを覚えましょう。

神さまは私たち一人ひとりを用いて、神さまの救いのご計画を進めていかれます。私たちの周りにはまだ神さまを知らない人がたくさんいます。神さまが私たちを祝福してくださっているのと同じように、神さまを知らないお友達や家族が祝福をくださる神さまを知ることができるために私たちが用いられるよう祈りましょう。

* 小さなお子さまには、話の内容等をわかりやすく、年齢に合わせて噛み砕いてお話くださいますようお願い致します。

（けんきん）会堂2階掲示板下の机に献金箱を設置しました。

おいでの際におささげください。

59、イエス様がいちばん （こどもさんびかをお用ください）